

われらの詩はどのよう

書きまがきか

現代の詩の流れに力

近代詩より現代詩へ

近代思想の特徴をなす自我中心主義は詩の
上下存々の花を咲かせつ、遂に象徴主義の完
璧な方法を生み出して、その頂点に至つた、

自我中心主義が智的に感性的に極端にまで
進歩された結果現れが子を結ぶして現れたの
であらう。

エーゼル、ポードル、マラルメの系列
はカクレリに至つて自我内面の意識を把握
する手法として象徴主義が完成された。その
ゆゑエーゼルアリスの意識的の自我へ
の転換、エクトーの分裂した自我に於て
善悪的なもの、揮毫的な努力、すべては
二拍り不拍りの音楽の如きは昂々たるものあり

夕空の甯星にすそ

ちかつた。

このようにして詩というものは言葉の技術

によつてこのように多うまく意味をも情緒的に

再現するかという方法だといふことが近代

主義の基礎の上で徹底的に追求された結果、

詩は何時か抽象された自我の内側で出口のない

いさましいを繰り返すことになり、現象かゝるは

なれた世界で言葉のレトリック（修辭）と意

匠代いうまみをやつすことが進歩だとすよ

うなあやまつた方向に向ひ、多くの人々には

分らなくなり、皮を剥けばおぼろツキ

うは世くなるこのゆくような状態に陥つて近代

詩は衰亡しかけたのである。

然しその中から現代詩は新しい輝きを

と昇りはじめた。その最むいかに

に於て、人間の性、道徳、エフアズいより守る

め、詩が使われたいより詩の中は失はれ

かけた人間内容が復活したことをいふ。

そこで、歌はわがものはもう

戦争の苦しみ民衆の思いであり、

詩人の心

抽象さした自我の内部ではなく、自我と現実との血の通ふような南連であつた。

此の事は日本に於ても例外ではない。中二
次大戦の結果として小作民階級が急速に没落

すよと昔に近代の自我中心主義を基礎とする
芸術は専断せざるを得なかつた。詩を地粹な

ものとして社会的な無意味な現実の動きと切り
はなし、もやほは現実から離れ去る世界が詩的

思考や言葉の操作にふけるものは既に詩壇の
主流から没落したゆえ、りやあうたしは詩は

我々が現在置かれてゐる社会的現実との深い
あつかりあひの中でのりやあうたはあはち

とちくなつて来た。創立此の現代詩一九五一
年版を以てその始るとか現在の日本の危機

とこの批判に根ざしてゐるりやあうたは証
明さしたものである。

現代詩の中の二つの流れ

このようにして近代詩より全く異つた次元

んをたつて太陽群のまうに昇りはじめた現代詩
 の流氷の中を明くかいたまきとちうやく積極
 的むかえをふいてつたむかひに、社会的理想ある
 くまところの不安と絶望の精神的危機を覺醒
 しやれと言ふや甲ん映し出してゆくことんじ
 リ救つてお出さうといいうもの、ちとちと
 つて生活実感の甲ある理想主義の精神を力つ
 つの流氷に大別することかおまき。

後者は歌おも是聖者として近代社会の矛盾

へう甲つとして出発し、70口レタリア詩の保
 境をうけついで中野、壺井、小龍、金子、岡
 本、うの流氷であり、前者はフランスの美術界
 術をうけてしユールリアリスリウの理論を展
 した若山、西崎、北川らの流氷である
 片方は今やほうはいとして全口の特
 場、農お、町に起りつ、ある美術家学者たる
 の流氷の歌声い。片方は古き古き詩論と作品を
 つて未開の分野を開拓しようとしてつるつ
 前しつ、荒地しつ、IOMしつ、うが、ル、70、に、の

居るに
ついで

われら
の海は
このよ
うにす
まむか

おれら
の現代
のかけ
全口に
起つて
勤労者

たすの
救済は
烈しい
力をも
ちあか
らりア
リ不

りの道
を迷ん
で来た
かそれ
もそれ
はとも
すれば

停飲の
てあり
経験さ
すのた
り方法
知ん未

紐を面
をまぬ
おれら
のあつ
たし、
又まじ
して

イニテ
リヤニ
ヤカハ
まつて
導かれ
る一群
は現実

この世
の解決
が現実
主義者
といふ
精神の
方向を
と

うちの
まのま
不安や
懐疑を
いふに
必要に
つた

おれら
のつと
まとい
う果て
逆に現
実の危
機を克
服

に押し
障害を
力をも
つたり
といふ
他向を
負ひあ
るか

つた。

この二
つの流
れは然
しとち
の間に
接近し
つ、あ

り冷や
の欠陥
を克服
しつ、
あまよ
うに足
を

進めし
時をま
にあや
まると
の結合
果て日
に現代
詩の

新しい
まは南
のあま
うか、
それら
は果し

てい
のよう
にちか
されり
のあま
うか。

